



きょうようときょういくのままに ⑳

遠隔教育 体感 教育の質

東京学芸大学名誉教授 篠原文陽児

今年5月から6月。真夏日あり夏日あり、晴れあり曇りや雨あり。湿度50%を下回る日あり、90%を超える日あり。目まぐるしく変わる天候。少なからず持病と付き合う老体の筆者には、やや堪える。

しかし、である。教育の情報化の最新動向について、ネット上の情報ではなく、責任ある関係者がナマ身で発するそれを見聞きし感じ取るようと、企画された多数のセミナーと展示のうち、特に遠隔教育を体感する機会を逃すまいとこのようを作り、身を挺して、いく。

前者は、去る5月23日(木)午後、東京は虎ノ門にある会議室での研究会。後者は、6月6日(木)から3日間、いずれも朝から晩まで。東京は有明の巨大なビルを会場とするイベント「NEW EDUCATION EXPO 2019 (NEE2019) in Tokyo」。

研究会は、文部科学省担当者による、遠隔教育を中心とする講演。配布された資料は、平成31年3月公表の「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(中間まとめ)」で、平成30年11月の柴山・学びの革新プランの具体化である。6月中には「まとめ」が公表されるという。本稿ご覧の7月には、すでにお持ちの方もいよう。講演内容は、文科省が目指す次世代の学校・教育現場の具体的なイメージをもとに、ハード上と利活用上の課題の5つを解決する「遠隔教育の推進による先進的な教育の推進」他、合わせて3つの柱を解説。特に、遠隔教育は教育の質を大きく高める手段として、学校同士をつないだ合同授業の実施や外部人材の活用、幅広い科目開設など、教師の指導や子どもたちの学習の幅を広げることや、特別な支援が必要な児童生徒等にとって学習機会の確保を図る観点から重要な役割を果たすという。担当者

のSociety 5.0時代の教育に向けた意気込みをナマで感じ取ることができ、大いに啓発された。

もう一つは、他社とはいえ、初日5日前に事故があったばかりの無人運転の電車に乗っての会場入り。大学改革、教育改革、教育の情報化、プログラミング教育、遠隔教育などがテーマのセミナーの開催と、最先端の教育機器や教材・教具、そして、学校設備の展示で埋め尽くされている。特に初日のお目当ての一つである遠隔教育では、大会実行委員会事務局のU社による「未来の教室を体感! Future Class Room」に参加。16名に限定された事前参加登録で、幸運にも、その一人に。欠席者があり、実際には12名が、4つのグループに分けられ、筆者は小学校と中学校の教員とおぼしき3名の方々とご一緒。会場と社の本社、そして、大阪支社を結んだテレビ会議システムと電子黒板およびタブレット端末を使って、世界遺産の調べ学習の体験。いやいや、天井とブース正面、左右に、どこを向いてよいやら、縦横無尽に映し出される映像と音と光の競演……、文字通り、体感の機会であった。

今年6月13日(木)、A新聞朝刊は一面トップの主見出しに「名医 ロボットで遠隔手術」の記事。リードには、東京にいる外科の専門医が北海道の病院にあるロボットを操作して手術するとある。

遠隔教育は、遠隔で学習者を操るのでなく、ナマミの教師や指導者が、通信回線を利用し、ナマミの学習者に、質の高い教育を実現する手段の一つである。教育の質は、ユニセフが2000年に学習者、環境など5つの規定要因を示し、今日では、国際プロジェクトSDGsの4番目にある。

いよいよ、遠隔教育の確かな成果が、期待できる。